

正課・課外の多様な学びを通して 人類の未来を切り拓く創造性を養おう

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

立命館大学には、充実した正課の教育プログラムに加えて、社会と連携したプログラム、課外活動、専門性を高める大学院など、多様な学びの場があります。それらを数多く経験することで、今社会で求められている「人間力」や「創造力」を養うことができます。

夢に向かってチャレンジする皆さんの成長を一層強くサポートするべく、

立命館大学では現在、2007年1月に就任した川口清史新総長の舵取りの下でさらに教育を充実させるための取り組みを進めています。

今回、学生生活を通して多様な学びを経験し、成長を遂げた学生2名が、総長との座談会を実施。

立命館大学でいかに学ぶべきか、大学は今どのような方向へと進みつつあるのかを尋ね、新入生の皆さんに贈る言葉を語り合いました。

先輩の体験、総長の言葉をしっかりと胸に刻んで、学生生活を通して多くの経験を積み、豊かな人間性と創造力を養ってください。

※出席者の回生等は2007年3月現在のものです

立命館総長 立命館大学長

川口 清史

Kiyofumi Kawaguchi



学びを一層深める正課と 課外活動の融合

林 私はこの春、文学部人文学科英米文学専攻の4回生になります。現在、教員になるという夢を目指して教職課程を履修しています。実践的な場で教育について学びたいと考え、夜間中学校で教科を教える教職ボランティアにも挑戦しています。また課外では学術系公認団体の探検部に所属しており、2006年度は46代続いた探検部の歴史の中で初めて、女性として主将を務めました。

小林 私もこの春から経済学部経済学科の4回

生になります。「大学に入ったら思う存分好きな勉強をしたい」。そんな意欲を胸に入学した私は、とにかく積極的に学ぼうと努めてきました。おかげで正課では成績優秀者として西園寺育英奨学金を受けることができました。また正課以外でも、経済学会学生委員会に所属し、経済学部生のほぼ全員が参加する論文とプレゼンテーションの大会「ゼミナール大会」の企画・運営や、広報誌の取材・編集に関わるなど、たくさんの貴重な経験ができました。さらに3回生では「産学協同アントレプレナー教育プログラム」を受講し、経済学部の枠を超えて学ぶ機会も得ました。

総長 お二人ともこれまで実に素晴らしい経験を積んでこられたようですね。まず評価したいのは、両人とも正課だけでなく課外の活動にも積極的に取り組んでこられた点です。立命館大

学では、正課と課外活動の両方を重視しています。正課と課外活動を融合させることで、一層深い学びを獲得することが可能だと考えているからです。林さんは、探検部の活動を通してそれを実感したではありませんか？

林 はい。私たち探検部は、鍾乳洞を探索したり、ラフティングで急流を下ったりといった活動をしています。けれど単に未知の領域に足を踏み入れることだけで満足しているわけではありません。究極の目的は、探検を通じて学術的な調査を行い、研究成果を発信することにあります。それぞれの所属学部の学びとリンクさせながら生物や経済、地理などについて調査を行います。その結果を「探検学」という冊子として発表したり、学園祭などの場で一般の方に向けて展示を行ったりしています。2004年の中国の洞窟調査では、新種の昆虫を発見し、先

輩がその成果を学術学会で発表したこともありました。現在探検部ではマレーシアでの樹上調査を計画中です。梯子を使って木に登る森林調査には、大きな危険が伴います。私たちはロープを使って100mもの深さの鍾乳洞を降下する技術を持っています。その技術を用いて木に登り、樹上調査を実行しようと思論んでいるのです。

総長 林さんの活動は、まさに正課と課外が融合し、専門性を高める好例ですね。もちろん課外活動そのものが、人間的成長を促すことは言うまでもありません。例えば体育会クラブでは、体を鍛え、技術を磨く過程で計画性や忍耐力が養われます。またクラブという組織の中で活動することで、組織をまとめ、考えの異なる多くの人とコミュニケーションをとる力も身につけていきます。こうした「人間力」を育む上でも、

課外活動は重要な役割を果たしているのです。
林 3回生時は探検部の主将として組織をまとめる役目を担い、身をもって組織をまとめる苦労を実感しました。新しい組織作りに悪戦苦闘する中で、多くの人の意見を聞いたり、自分の考えをきちんと伝えたり、リーダーとして組織を動かす力がついていったように思います。

社会体験と学業との往復が 学びを生き生きと輝かせる

小林 3回生の時、文部科学省が支援する優れた教育プログラム「現代GP」にも採択された

「産学協同アントレプレナー教育プログラム」を受けたことが、私にとって学びの幅を広げる大きなきっかけになりました。講義では、さまざまなベンチャー企業の社長から体験に基づく教えるを聴く機会を得ました。講義の内容もさることながら、講義外でのコミュニケーションを通して、多くの経営者と知己を得たことが今、財産になっています。このように社会と関わりながら学べるプログラムが数多く揃っていることも立命館大学の魅力だと思うのですが、いかがでしょうか？

総長 その通りです。立命館大学では、社会との連携を強めた教育を推進しています。より高度な教育を実現するためには、限られた学内の資源のみに頼らず、社会にある豊富な教育・研究資源を活用することが必要だと考えているからです。もちろんそれには、資源を提供してく



川口 清史（かわぐち きよふみ）1945年8月31日生まれ・61歳 立命館大学政策科学部教授 博士（経済学・京都大学）
座右の銘は「学ぶとは誠実を胸に刻むこと」、趣味はアメリカンフットボール観戦とクラシック音楽鑑賞

【専門分野】

経済学（経済・社会システム、経済事情および政策学）

【所属学会】

国際第3セクター学会
国際公共経済学会
社会・経済システム学会
日本協同組合学会
日本NPO学会 ほか

【職歴】

1969年3月 京都大学経済学部卒業
1971年3月 京都大学大学院経済学研究科修士課程修了
1974年3月 京都大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
1976年4月 立命館大学産業社会学部助教授
1987年4月 立命館大学産業社会学部教授
1994年4月 立命館大学政策科学部教授
1994年4月 立命館・UBCジョイント・プログラム教務主任（～1995年3月）

1996年4月 政策科学部主事
1997年4月 政策科学研究科主事（～1999年3月）
2000年4月 教学部長
2003年4月 立命館・UBCジョイント・プログラム教務主任
2004年4月 政策科学部長、政策科学研究科長
2007年1月 立命館総長・立命館大学長に就任

【主要著作】

単著 『非営利セクターと協同組合』、日本経済評論社、1994年
『ヨーロッパの福祉ミックスと非営利・協同組織』、大月書店、1999年
共著 『市民がつくるくらしのセーフティネット』（共編著）、日本評論社、2004年
『よくわかるNPO・ボランティア』（共編著）、ミネルヴァ書房、2005年

Interview with the Chancellor

正課・課外の多様な学びを通して
人類の未来を切り拓く創造性を養おう



ださる社会の方々の協力が不可欠です。立命館大学は、これまでも産業界や自治体との連携に積極的に取り組み、協力関係を築いてきました。その実績が、現在社会との連携を強める上でも糧となっています。

お2人はその他に社会と関わりのあるプログラムを受講したことはありますか？

小林 私は先述の産学協同アントレプレナー教育プログラムの一環として、昨年の夏、大和ハウス工業株式会社でのインターンシップを経験しました。約1ヶ月間、建築途中の工事現場を見学したり、営業に同行したりと業務の一端を実体験できたこと、何より自立性や創造性が必要となる現場を肌で感じる事ができたのが収穫でした。学んだことが「社会で実践できる」と再認識したことで、その後授業にも一層力が入るようになりました。

林 私にとっては教職課程の先生から紹介された夜間中学校での教職ボランティアがそうでした。夜間中学校の生徒は、学齢期にさまざまな事情で学校に通うことのできなかった60歳以上の方々を中心です。学ぶことを渴望し、嬉々として学習に打ち込む人たちとの出会いは感動的でした。彼らから教えるやりがいや学ぶ喜びを教わったことで、私自身の学ぶ目的も明確になり、それまで以上に主体的に勉強に取り組めるようになりました。

総長 寺山修司はかつて「書を捨て、町へ出よう」と言いました。私は「勉強しながら、社会も体験しよう」という意味を込めて、よく「書を持って、町へ出よう」と言います。社会体験を通して机上の学習では得られないものを獲得

することができます。

さらに重要なのは、それを学業にフィードバックすることです。実社会を垣間見て、社会に出る上で自分にどんな知識や能力が不足しているのかがわかり、学習の必要性を再認識する。こうした社会体験と大学での学習の往復が、学びを一層生き生きとしたものにします。

多様な個性、異なる価値観に触れ
「器量」を大きく育てる

総長 お2人の体験に加え、国際プログラムでの学びにも是非取り組んでもらいたいものです。外国で学ぶことの意義は、外国語を習得することに留まりません。異なる文化や価値観に触れることで、自分自身の考えを相対化し、客観的に物事を捉える視点を養うことも重要な要素です。もちろん国際舞台で活躍する可能性も大きく拓けます。例えば政策科学部の2回生で行われる研究入門フォーラムでは、毎年マレーシアで調査研究を行っていました。ある学生は、その時の調査が学部、大学院での研究テーマとなり、ついには博士号を取得。現在、OECD（経済協力開発機構）の職員となり、パリに駐在しています。国際プログラムに参加したことが、国際機関で働く道へとつながったのです。また、大学院に英語のみで修了できる課程を設けるなど、本学はますます国際的な大学になり

つつあります。学内で国際的な学生に触れることも貴重な経験になるはずです。さらに、立命館アジア太平洋大学（APU）との交流により、学生の約半数が留学生という多文化環境を体験することもできます。

小林 私にも親しい留学生の友達がいます。彼らと接しているとカルチャーショックを受けることがしばしばありますね。

林 昨年、探検部の調査でインドネシアに行くことになった時のことでした。協力者を募ろうと、学内のあちこちに告知のポスターを貼ったところ、インドネシア人留学生が名乗り出てくれ、現地での調査をサポートしてくれたのです。あの時は本当に国際色豊かな大学だと実感しました。

総長 留学生ばかりではありません。スポーツ・文化活動に秀でた学生や学力の優れた学生など、立命館には実に多様な学生が全国から集まっています。そうした多様な個性と触れ合うことも、大いに刺激になります。

どれだけ物事を大きく捉えられるか、どれだけ大きな構想を描けるかは、人間の「器量」によると私は考えています。この「器量」は、若い時代に多くの経験を積み、多様な価値観に触れた分だけ大きくなります。大学時代は「器量」を大きくする絶好のチャンスです。立命館の多様性に触れ大きく成長してください。

教育・研究水準を高める
教学改革と大学院強化

総長 これまで立命館学園は時代の要請に応える形で改革を進めてきました。創立以来100年以上の歴史の上に現在の立命館が成り立っているのです。2006年、その歴史の到達点を踏まえ、これからのミッションと進むべき方向を確認するものとして「立命館憲章」を制定しました。そこでは、日本に、地域に立脚した大学であると同時にアジアに開かれ、世界へとつながっていく大学となり、人類の未来を切り拓くべくまい進することを明示しました。皆さんもぜひ「憲章」を熟読し、学生生活の指針にしてください。

先ほど申し上げた「社会との連携強化」や「国

際教育強化」も含め、大学が取り組むべき課題はいくつもあります。とりわけ注力すべきは、世界と渡り合える高度な教育・研究水準を確保することだと私は考えています。そのために一層の教育の充実化を進めていくつもりです。まずは4年間での到達目標を定め、各課程で教育効果を管理、保持するシステムの確立を目指しています。卒業時には一定の学力を保証するような仕組みを作り上げなければいけません。そのためには新入生の皆さんにも大学で学ぶことに対する責任感と自覚を求めたいと思います。



小林 私は、大学で学びたいという強い気持ちを抱いて立命館大学に入学したため、なんとしてでも多くのことを学び、身につけようという気持ちで取り組んでいます。その中で、自らの学びの質を高める上で、論文作成というのは能動的な学びの形として重要だと考えています。私は学んだ成果を何らかの形にしたいと思い、論文作成にも力を注ぎました。自分で関心を持ったテーマについて文献を調べ、分析・考察する過程では、それまで蓄積してきた知識や能力をどう生かすかが試されます。2回生の時にまとめた論文が父母教育後援会の優秀賞を、また3回生では論文作成と共にゼミナル大会での発表も行い、佳作を受賞。評価されたことは、大きな自信になりました。

林 碧

(はやし・みどり)
文学部 人文学科 英米文学専攻 3回生
学術系公認団体探検部 2006年度主将



Interview with the Chancellor



総長 論文作成過程は、日本の大学の教育の質を担保していると言っても過言ではありません。立命館大学では少人数のゼミで卒業論文作成のための指導を緻密に行う中で、高度な知識と思考力を育成しています。

さらにもう1つ学力を保証していく仕組みとして、大学院のレベル向上を目指しています。大学院生が力量をつけることは、大学の研究力の向上につながるだけでなく、学部教育の活性化にも役立ちます。そのため本学では、大学院生が学部生の学びをサポートするTA（ティーチングアシスタント）制度など「ピア・エデュケーション」の仕組みを今後一層高度化させていくつもりです。

林 私は、英語教師を目指す大学院生、学部生と自主ゼミを作り、週に1度授業研究をしたり、年に数回模擬授業を行ったりしています。年齢は少ししか違わないのに、大学院生とは知識量や学びに対する姿勢に歴然とした差を感じます。彼らと一緒に勉強することが、より高度な考え方や知識を得ることはもちろん、学びに対するモチベーションアップにつながっています。

立命館大学で、知識や経験を
「現実を変える力」へと転化する

林 新入生に先輩としてアドバイスするとして、大学の資源を最大限活用してさまざまなことにチャレンジしてほしいと伝えたいです。1つのことに打ち込むと、それに付随してさまざ

まな力が育まれていきます。そうしてたくさんの経験をし、4年間で魅力的な人に成長してほしいですね。

小林 大学は、能動的な学びの姿勢を身につけるところです。高校までのように与えられる情報や教育をただ享受しては成長することはできません。自分から積極的に新しい学びを獲得してこそ、大きく飛躍できるのだと思います。総長からもぜひ、新入生へのメッセージをお願いします。

総長 欧米の技術を模倣し、追いつくことを目的としていたキャッチアップの時代は終わりました。もはや過去と同じこと、隣人と同じことをしては、発展は望めません。次の時代を創る創造性、時代の先を読む視野の広さや洞察力、時代を切り拓く行動力を備えた人材、「現実を変える力」を身につけた人材が今、求められているのです。

「創造力」はある日突然身につくものではありません。持てる「知識」を駆使し、多様な思考や行動を経て初めて身につくものなのです。まず新入生の皆さんに求めるのは、本、中でも特に難しい古典を読んで欲しいということです。読書は知力を鍛える砥石です。難しい理論を学ぶ中で思考の方法を身につけて欲しい。そして、自らが興味を持ったことに関しては、正課、課外を含めた様々なプログラムを利用して学びを深めてください。立命館大学のプログラムはこれまで皆さんが身につけてきた知識や経験を、「現実を変える力」へと転化する装置となるでしょう。新入生の皆さんが立命館大学で学ぶ4年間で決定的な変貌を遂げられるよう期待しています。

小林 弘典

(こばやし・ひろのり)
経済学部 経済学科 経済戦略コース 3回生
「産学協同アントレプレナー教育プログラム」受講
2005年度、2006年度西園寺育英奨学金 受給

